

地域研修報告書

2013



1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 …… 地域研修ガイダンス

2 …… 地域研修1年間の流れ・研修地一覧

3～23… 地域研修ゼミ報告（2013年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加21ゼミ 計308名）

3	浅妻ゼミⅠ	小型家電リサイクルの実施状況調査 研修地／札幌市・石狩市・帯広市		14	高原ゼミⅠ・Ⅱ	食関連産業による地域活性化と食産業ネットワーク 研修地／帯広市・音更町・芽室町・清水町	
4	浅妻ゼミⅡ	木質バイオマスの利用促進と地域経済・環境への影響 研修地／芦別市		15	中園ゼミⅠ・Ⅱ	旭川市における若者就労支援の実態と課題 研修地／旭川市	
5	内田ゼミⅠ・Ⅱ	ぬかびら源泉郷における地域づくりとリーダーたち 研修地／上士幌町（ぬかびら源泉郷）		16	西村ゼミⅠ・Ⅱ	環境未来都市・下川町：その魅力と可能性を探る 研修地／下川町	
6	大貝ゼミⅠ	十勝地域における農業の6次産業化の展開を学ぶ 研修地／帯広市・鹿追町・音更町・芽室町・幕別町・上士幌町		17	平野ゼミⅠ	大学におけるフェアトレード活動の実践と課題 研修地／札幌市（本学）	
7	大貝ゼミⅡ	大阪中小企業、町工場の現状と課題を学ぶ 研修地／大阪府大阪市・東大阪市・八尾市		18	平野ゼミⅡ	市民運動におけるフェアトレード活動の実践と課題 研修地／札幌市	
8	奥田ゼミⅠ・Ⅱ	旭川家具—北海道を代表する加工型地場産業—を学ぶ 研修地／旭川市・苫前町		19	古林ゼミⅠ	サケを中心とする地域産業の形成 研修地／標津町	
9	小坂ゼミⅠ・Ⅱ	北電力発電所の現状調査 研修地／伊達市・厚真町		20	古林ゼミⅡ	軽種馬の生産・育成・流通および利用 研修地／新ひだか町・様似町・浦河町・日高町	
10	川村ゼミⅠ	学生アルバイトの実態 研修地／札幌市		21	水野ゼミⅠ・Ⅱ	朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修 研修地／幌加内町（朱鞠内）	
10	川村ゼミⅡ	若者の労働と生活 研修地／札幌市		22	山田ゼミⅠ	富良野・美瑛の観光の取り組みを知る 研修地／富良野市	
12	小田ゼミⅠ・Ⅱ	自然環境に優しい地域づくりを学ぶ 研修地／旭川市		23	山田ゼミⅡ	長野・小布施町の地域ブランドと東京の北海道ブランド 研修地／長野県小布施町・東京都	
13	佐藤ゼミⅠ・Ⅱ	北海道における再生可能エネルギーの実態と可能性 研修地／伊達市・寿都町					

24 …… 地域研修報告会

2013 年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長

森下 宏美



「地域研修」は、地域経済学科の創設時に、将来の地域の担い手を育てるための実践型の授業として新設され、その後、経済学科でも実施されるようになり、「教育研究高度化特別推進事業」に採択されるなど、各方面から高く評価されてきました。北海学園は昨年、北海道との地域包括連携協定を締結しました。この協定を受け、本学はいま、地域の拠点校として、さらに高いレベルで地域社会に貢献できる大学づくりを目指しています。経済学部としても、「地域研修」のさらなる充実を含めて、地域連携強化のための事業を進めていきたいと考えています。

さて、皆さんは今回の研修を通じて、地域をどのように肌で感じ取ったでしょうか。札幌のような都会にはない暮らしの問題への気づき、普段は体験できない第一次・第二次産業の現場での仕事、地域づくりの担い手の方々との交流、アンケートや聞き取りでの初対面の人々への働きかけなど、未知の経験が数多くあったはずですが。それらの経験から、皆さんは是非、自分の住む地域も含め、地域における人々の生活に対する想像力を大きく育ててほしいと思います。

「地域研修」は、事前学習、現地での調査・研修、結果報告という一連の流れの中で進められていきます。事前学習ではさまざまな情報を集め、課題を整理したり仮説を立てたりしながら、調査の対象や内容、方法を決めていきます。現地での調査・研修では、自らの計画に沿って主体的に調査を進めます。そして、それによって得られた知見をもとに考察し、その結果を公表します。この流れは、対象は変わっても、ものごとを探究するさいの基本的な道筋です。大学での学修を通じて、是非ともこの探究心に磨きをかけてください。

この研修を通じて、学生同士の、そして学生と教員との交流が深まり、ともに学ぶ者同士としてのきずなが一層強いものになったと思います。研修によって得たすべての経験が、皆さんの社会での活躍の糧となることを強く願っています。

なお、この研修を実施するにあたり、地域住民や自治体・企業・団体など多くの方々から、多大なご協力をいただきました。最後になりますが、皆さまから頂戴いたしました数々のご厚意に対し、ここにあらためて、心より感謝申し上げます。

地域研修ガイダンス | 2013年4月13日 50番教室





浅妻 裕

経済学科
教授

小型家電リサイクルの実施状況調査

研修地：石狩市・帯広市・札幌市

●研修目的

2013年4月から「小型家電リサイクル法」が施行され、多くの道内市町村で小型家電の回収システムを構築し始めている。道内リサイクル業者も近年のレアメタルの価格高騰などからリサイクル能力を高めてきた。激動期にある小型家電リサイクルの現状を把握する。

研修地・日程

9月12日	株式会社マテック石狩支店内工場（視察） マテック事業所内にてパソコンの解体実習 じゅんかんコンビニ24マテックプラザ店（視察）
9月13日	帯広市市民環境部清掃事業課（ヒアリング） 株式会社エルバ北海道（自動車解体）（視察） 株式会社ウィンクリン（容器包装リサイクル等）（視察）
9月14日	じゅんかんコンビニ24西岡店（視察）
9月27日	石狩市市民生活部環境室ごみ対策課（ヒアリング・視察）

写真キャプション

① 金メッキで覆われた基盤。② 分別技術について説明を受ける。③ パソコン解体、まずは大雑把に分解する。④ 帯広市市民環境部にて説明を受ける。⑤ 帯広での昼食。⑥ じゅんかんコンビニで実際に小型家電を投入。



●総括

これまで多くの家電製品は分別収集の対象とはならず、不燃ごみや粗大ごみとして排出されそのまま埋め立てられてきた。小型家電リサイクル法に基づく制度を適用した市町村では分別回収が始まり、小型家電は適正処理・リサイクルを行う認定事業者へ引き渡されている。再生資源回収や適正処理が目的である。これに際しての解体コストが問題になる。ノートパソコンの解体実習では、金が多く含まれる基盤やCPUを取り出すのに相当の労力を有することが分かった。シュレッダーによる解体・分別も含め、一定量の家電が集められることが重要である。認定事業者に大量の小型家電が集められることで効率的な解体・リサイクルを行うことが可能になりつつある。市町村もこの制度を適用するメリットがある。小型家電を無料で回収しても最終処分量が減ることから、財政支出を減らすことができる場合がある。また、マテック社は行政回収とは別に「じゅんかんコンビニ24」を道内各地に設置し、ほとんどすべての家電製品を無料で回収している。我々が視察した箇所はどこも盛況であった。「都市鉱山」と呼ばれる小型家電のリサイクルは少しずつではあるが進んでいることが分かった。

学生研修記

小型家電リサイクルの成果と課題

私たちは、小型家電回収・リサイクルにいち早く取り組んでいた帯広市と石狩市で調査を行いました。私から見るといずれの自治体でも回収量は多く感じられ、市民のリサイクルに対する意識が高いのではないかと思います。札幌でも10月から回収がはじまっているのでたくさん集まればいいと思います。北海道では主にマテック社が市町村で回収された小型家電のリサイクルを行っています。また同社のじゅんかんコンビニ24では利用者にポイントがたまるシステムを用いるなど積極的な回収を呼びかけています。とはいえ、リサイクルには多大な労力や費用がかかりそれに見合うだけのものが得られない場合があることや、携帯電話やパソコンなどの個人情報の扱いをどのようにするかなどの課題があることも同時に学習できました。現代の大量消費社会のあり方にも思いを巡らすことができた研修でした。



竹花 理沙
経済学科2年
北広島高校出身

ゼミでの研究にも役立つ地域研修

1学期のゼミで、小型家電を含むリサイクルを経済的にどのように理解すればよいのかを学んできましたが、夏休みにこの地域研修に行くまでは、具体的に小型家電がどのように回収され、どのように解体されるのかイメージすることができませんでした。マテック社の工場に小型家電が集められる様子を見学したり、実際に自らパソコンを解体したりすることで、解体によってレアメタルや貴金属を回収する際のポイントが理解できました。例えば基盤の色や製造時期によってどの程度価値があるものかを見分けることが重要であることがわかりました。研修自体は有意義なものでしたが、他のゼミ生と一緒にご飯を食べに行ったり、ホテルの部屋で交流の時間を持つことができたことも思い出に残っています。地域研修はゼミ生の結束を強め、共同研究を進める上でも大きな効果があると思います。



二本柳 航平
経済学科2年
中標津高校出身



浅妻裕ゼミⅡ

参加学生数 8 人



浅妻 裕

経済学科
教授

木質バイオマスの利用促進と地域経済・環境への影響

研修地：芦別市

●研修目的

面積の88%が森林という芦別市では木質バイオマスの利用促進に向けて様々な取り組みが行われている。市有施設での木質チップの利用、民間企業での木質ペレットの製造等である。地域経済や森林環境保全にもポジティブな影響が期待されている。この進捗状況を確認する。

研修地・日程

10月3日	北日本精機株式会社（視察・ヒアリング） 芦別市政策振興課（ヒアリング） スターライトホテル（ヒアリング・宿泊）
10月4日	空知総合振興局森林室（森林散策・枝打ち）
10月5日	星の降る里百年記念館（見学）

●総括

代表的な取り組みは、市の温泉施設である「スターライトホテル」での木質チップボイラーの導入に関連した事業である。従来は重油代として年間約5700万円が地域外に流出していたが、安価な林地残材を活用した木質チップボイラーを使用することで、林地残材の調達、燃料製造、燃料取扱いにそのお金が回り、それがさらに地域内で循環する。現在、ボイラーの据え付け工事中であり稼働後の効果が期待されている。課題としては、大量の木質チップの安定供給であり、これがクリアされれば他の大型ボイラーを有する市有施設でも利用が広まるものと思われる。

民間では、ペアリング製造で世界的に知られている北日本精機株式会社がペレットとペレットストーブを製造・販売している。ペレットの価格の高さや運搬の問題からペレット需要は多くはなく事業を拡大するという状況にはないが、地域全体で木質バイオマスの利用促進を進めていることを象徴する重要な事業である。

これらの林地残材や間伐材の活用は森林環境保全の点からも重要である。我々は道有林に入り実際に枝打ち作業を行うことで、森林環境保全と地域内資源循環をリアルに捉えることができた。

学生研修記

木質バイオマスの生産・利用の現場を見て

今回の地域研修で、木質バイオマスに関して多くの知見を得ることができた。北日本精機株式会社では、木質ペレットの製造工程を見ることができ乾燥工程が非常に重要であることが分かった。また、完成したペレットが実際にストーブで使用されており独特の暖かさを感じることができた。市役所のヒアリングでは、市の木質バイオマスに関連する政策の進行状況やそれに対しての市民の認知度を知ることができた。さらに、私たちは担当者からの説明を受けながら森林を散策し、林地残材等の木質バイオマス資源が豊富に存在することが実感できた。しかしながら、需要量やコスト、保管場所などペレットの流通に関する問題、木質バイオマスの世間の認知度、ペレットストーブの普及率が低いこと等の問題があることも明らかになった。さらに関心を持ってもらう取り組みが必要ではないだろうか。



戸戸 大祐

経済学科3年
とわの森三愛高校出身

むしろ「研修後」が重要と実感

私たちのゼミでは木質バイオマスについて研修を行うことにしました。10月に行われた芦別市の地域研修では、林業衰退を食い止めるために導入に至ったことや地域に活力を取り戻したいという木質バイオマスにかけける思いを直に聞くことができました。また一般家庭普及には煙突設備がなく木質バイオマス導入が困難なこと、輸送にコストがかかることなど普及に課題が残ることも分かりました。研修前は木をストーブで燃やしエネルギーを生み出せる簡単なものと思っていたためイメージが大きく変わりました。研修後は、その成果を活かしてゼミ論文を作成しました。テーマは「木質バイオマスの普及に関する国際比較研究」で、内容構成も自分達で考え書き進めました。地域研修に行って終わりではなくそこで得たものをもう一度整理・検証し更に深めていくことができてもやりがいを感じることができました。



鈴木 詩織

経済学科3年
札幌西高校出身

写真キャプション

① 芦別市役所での聞き取り。② 芦別名物のガタタララーメン。③ スターライトホテルにて歓談。④ 空知総合振興局の担当者からの説明。⑤ 枝打ち用の高枝のこぎりを手にする。⑥ 枝打ち作業中。



1



2



3



4



5



6

内田和浩ゼミI・II

参加学生数18人



内田 和浩

地域経済学科
教授

ぬかびら源泉郷におけるまちづくりの浸透状況

研修地：上士幌町（ぬかびら源泉郷）

●研修目的

昨年度は、ぬかびら源泉郷におけるまちづくりリーダー3人へのライフヒストリー調査（質的調査法）による聞き取り調査を行なった。本地域研修では、前期のゼミナールI・IIで学んだ量的調査法によって、これらリーダーたちが行ってきたまちづくりの成果として、ぬかびら地区の住民全体にまちづくり実践がどれだけ浸透しているのか、アンケート調査による住民悉皆調査を行って明らかにしていく。

●総括

内田ゼミは、ゼミI（2年生）とゼミII（3年生）が協力してゼミ学習を進めている。今年度は、具体的な地域づくりにおける地域住民全体の意識分析へ向けて量的調査法の習得をめざした。テキストをグループ毎に分担し、3年生がリーダーとなってレジュメをつくり、全体で報告して議論しながら理解を深めていった。そして地域研修では、昨年度に引き続きぬかびら源泉郷を訪ね、アンケート調査による住民悉皆調査を行った。また、若手の集まりである「火曜会」に参加し交流を深め、その後のまちづくりの進展を聞くとともに、空き時間には源泉郷内のフィールドワークを行った。

量的調査は、いわゆるアンケート票による調査であり、一件簡単そうに見えるが、実はそのような回答になるかを事前に予測して質問票を作成しなければならず、事前学習が大変重要である。地域研修の前日になんとか完成した質問項目は、分析してもなかなかその実態に迫ることができず、その時になってやっとその重要性に気づくのである。また、悉皆調査では留守の家も多く、回収作業に苦労した学生も多かった。

しかし、地域研修そのものは、地域社会で暮らす生身の人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験する、とても良い機会になったと思う。2年間お世話になったぬかびら源泉郷の皆さんには、心から感謝したい。

研修地・日程

9月4日	事前学習(大学にて)－アンケート調査票の作成と打ち合わせ
9月5日	「ぬかびら源泉郷のまちづくり」(ひがし大雪自然館) 中田将雅氏(上士別町観光協会事務局長) 調査票配布作業(全世帯への配布)
9月6日	調査票回収作業①(各グループ) ぬかびら源泉郷内フィールドワーク①(各グループ) 調査票回収作業②(各グループ) ぬかびら源泉郷内フィールドワーク②(各グループ) 火曜会メンバーとの交流会(ぬかびら文化ホール)
9月7日	調査票回収作業③(各グループ) ぬかびら源泉郷内フィールドワーク③(各グループ) 調査票回収作業④(各グループ)

学生研修記

地域研修を通じて



清水 大樹

地域経済学科2年
札幌平岸高校出身

内田ゼミは十勝の上士幌町「ぬかびら」を研修地として選んだ。昨年は地域の担い手、今年はその地域住民に対し量的調査を行い、担い手の地域づくりを住民側がどのように感じているかを調査した。研修中「火曜会」に参加し担い手の熱意に触れた。僕は胸が熱くなったのを鮮明に覚えている。しかし、回収したアンケートの結果は冷淡な印象を受けた。中でも「地域づくりに参加したいか」の問いには3割程度の支持しかなく、これを職業別にクロス集計をすると担い手側である自営業が大半を占めた。湯めぐり、味めぐりなどの活動の認知度も、関わり薄い住民にとっては低いことがわかった。この結果を受け、「担い手」の考えが住民に認知され浸透するのは容易ではないことを、研修を通じて痛感することになった。

存在しない現実を受け入れること

私達は2泊3日でぬかびら源泉郷へ研修に行きました。昨年度、同地でまちづくりの担い手を対象に調査した結果を踏まえて、まちづくりの住民への浸透度を計るために、この度再び同じ地へ赴くこととなりました。現地ではアンケートの配布・回収作業のほか地元の方々と交流する機会があり、そこで私が印象に残ったのは「都会と同じことをやっても勝てない」という地元の方の言葉でした。

ぬかびらにはスーパーやコンビニはおろか、病院も救急車もありません。しかし、多くの住民は不便さやリスクを承知の上でぬかびらに住み続けています。それ以上に、この街には自然環境をはじめとする魅力があるからだと思えました。

現地での活動を通じ、ないものねだりではなく、存在しないという現実を受け入れ、その場にあるものを活かそうという考え方もあっていいのだと思いました。

写真キャプション

- ① ひがし大雪自然館。②「火曜会」との交流会。
④⑤ ぬかびら温泉郷。



大貝健二ゼミ I

参加学生数 11 人



大貝 健二
地域経済学科
准教授

十勝地域における農業の6次産業化の展開を学ぶ

研修地：帯広市・鹿追町・音更町・芽室町・幕別町・上士幌町

●研修目的

本研修では、国内有数の大規模農業地帯である北海道十勝の大地で、広がりつつ農業の6次産業化の現状と課題を探ることを目的とした。なぜ6次産業化を進めるのか、この疑問に対する農業経営者、中小企業者の熱い思い基に、地域の将来を展望する。

研修地・日程	
9月10日	大草原の小さな家（鹿追町） 長坂農園（幕別町） 帯広市役所（帯広市）
9月11日	株山本忠信商店（音更町） 株大野ファーム（芽室町） ㈱プロットアジアアンドパン フィック：畑カフェ 北海道中小企業家同友会農業経営 部会との懇談会
9月12日	街十勝しんむら牧場（上士幌町） 東洋農機株式会社（帯広市）

写真キャプション

- ① 長坂農園ヒアリング。② 帯広市役所でのワークショップ。
- ③ ㈱大野ファーム。④ 農業経営者との意見交換会。⑤ 十勝しんむら牧場。⑥ 東洋農機株式会社。



●総括

今回の研修は、北海道中小企業家同友会とから支部農業経営部会協力の下で実施することができた。また、同研修はヒアリング調査が中心となった。2年生にとっては、やることなすこと全てが初めての経験であり、多くの失敗を重ねた2泊3日であった。そのような研修を通じてゼミ生が調査を通じて明らかにしたのは次の諸点である。

第1に、農業経営者が6次産業化を実践することによって何を實現したいのか、と言うことである。十勝地域では大規模農業が展開されている。裏を返せばわざわざ農業経営者が農業生産物を加工・流通・販売等手がけなくとも良いのである。しかし、敢えて6次産業化に取り組むのは、「農」と「食」の距離をもっと近づけ、出来るだけお互いの顔が見えるところで農業をしたいという思いがあることが分かった。

第2に、農業経営者及び農業関連企業の経営ビジョンと地域の将来が合致していることが確認できた。今回ヒアリング調査で訪問した企業等はいずれも自社だけがよければ良いという考えはなく、企業の存立基盤である地域なくして企業の展開はないとのスタンスが強く感じられた。

学生研修記

現場に出て生まれる新たな考え



川内 昂
地域経済学科 2年
函館西高校出身

私たちは「農業における六次産業化の可能性」をテーマとして帯広市を中心に十勝地域を調査しました。行政機関は、六次産業化を進めるために様々な政策支援をしていますが、実際に六次産業を行っている農家の方からは六次産業化を推進する意義と、既存の一次産業を盤石しておく必要性に対して、率直な意見を聞くことができました。また、農業の現場では臭いがきついイメージでしたが、実際には無臭の牛のフンがありなど、先入観だけで物事を判断するのは間違いだと気づかされました。

研修は、当初想像よりもかなりハードでした。しかし、現場で多くの方々からお話を聞くことができ、また様々な体験ができました。現場に赴き、直接声を聞き肌で感じることで、ひとつの問題を多面的に考えることの大切さを学びました。この経験を活かして、新しい考えを生む力を身につけ、成長していきたいです。

時間との付き合い方



松本 晃
地域経済学科 2年
網走南ヶ丘高校出身

私たちは十勝を訪問しました。十勝では、農業の六次産業化の魅力と可能性、十勝の農業関連産業の展開、帯広市の産業支援策について学ぶために、農家・企業・帯広市役所など8か所を訪問しました。実際に現地に行き、農家の現状や取り組み、TPPに関する各農家の考えなど、資料だけでは得られない生の声を聞くことができました。特に、音更町の山本忠信商店では、地域に根付いた会社づくりを実践し、社員一人一人が地域活性化に貢献していることを知りました。この考え方はゼミのテーマにも密接に関わるもので、地域活性化についての新たな視点が得られたと思います。

また、多くの研修先を訪問したので限られた時間の中でどう考え行動すればよいのかを改めて考えさせられるものとなりました。この経験は今後の大学生活を送る上でも大変よい経験になったと思います。



大貝健二ゼミⅡ

参加学生数9人



大貝 健二

地域経済学科
准教授

大阪中小企業、町工場の現状と課題を学ぶ

研修地：大阪府大阪市・東大阪市・八尾市など

●研修目的

本研修では、中小企業によるものづくり集積地である大阪を訪問した。テキスト等では目にする中小町工場の実態、現状と課題についてヒアリング調査を通じて明らかにすること、北海道と大阪の地域特性の違いを肌で感じることを目的とした。

研修地・日程

6月21日	移動 大阪中小企業家同友会青年部会 阪南大学関ゼミとの懇談会
6月22日	月盛スクリーン株式会社 ミノル化学工業株式会社 藤原電子工業株式会社 株式会社千代田 細川コンクリート株式会社 株式会社つまようじ資料館 堺打刃物資料館 ※数グループに分かれて訪問
6月23日	阪南大学にて合同調査報告会
6月24日	MOBIO（ものづくりビジネスセンター大阪） 大阪市内視察

写真キャプション

① 阪南大学との集合写真。②株式会社千代田でのヒアリング風景。③④ ミノル化学工業。⑤ 藤原電子工業株式会社ヒアリング風景。⑥ つまようじ資料館でのレクチャー。



●総括

本研修は北海道内ではなく、敢えて大阪の中小企業を調査した。その中で明らかになったことは次の通りである。第1に、東大阪を中心とした産業集積では伸線、鉾螺が基盤となった地域であると考えていたが、実際にはそれ以外にも多様な業種で構成されていることである。大阪東部地域の町工場の特徴は、「歯ブラシからロケット部品まで」とよく言われるが、企業訪問を通じてその一端を垣間見ることができた。第2に、大阪のものづくり企業は、新興国の技術競争に巻き込まれている中で、「何を狙っているのか」といった経営ビジョン等に関して、経営者の方々の本音を聞くことが出来た点である。第3に、大阪と北海道の産業構成について、地域間比較の視点を養うことが出来た点である。大阪での調査を通じて、北海道の産業特性、地域的な強みは何であるのか、客観的に把握、分析できる視点を養うことが出来た。また第4に、今回は阪南大学経営情報学部関智宏ゼミと合同で調査を実施したが、合同調査や学生交流を通じて、調査の手法、関心の差異等から、お互いの価値観の違いに触れることができ、非常に刺激的な地域研修となったことである。

学生研修記

産業に見る地域性の違い

「地域の活性化とは何か」をテーマにしている大貝ゼミⅡは、製造業の産業集積が形成されている大阪へ3泊4日で赴き、町工場を視察し、北海道の中小企業と何が違うのか検討しました。現地での研修は、阪南大学と合同で実施し、大阪府中小企業家同友会青年部会の協力の下、パネルディスカッションや企業へのヒアリング調査を行いました。

ヒアリング調査では、中小企業7社をグループ別に訪問しました。ヒアリングの結果から明らかになったことは、経営者の方々の意識に共通点があることでした。つまり、非常に強い向上心と危機感を持って日々の経営に取り組まれているということです。常に海外企業との競争にさらされている大阪製造業の地域性ではないかと考えました。北海道にも多くの中小企業がありますが、これまでの調査とは違った雰囲気を感じる事が出来ました。

北の大地を飛び出して学んだこと

私たちは、北海道を飛び出し大阪を訪問しました。研修は、阪南大学経営情報学部の関ゼミのみなさんと実施しました。初日は、大阪府中小企業家同友会青年部の方々とパネルディスカッションを行いました。「働きたい企業とは、どんな企業か？」というテーマで、複数のグループに分かれて議論し、それぞれのグループで答えを出していきました。

2日目はグループごとに大阪の町工場を訪問しました。日頃行っている工夫や現在抱えている問題などのお話をうかがいました。3日目は阪南大学でヒアリング調査結果をプレゼンにまとめ、報告会を行いました。

大阪研修では、うまく表現出来ませんが、北海道とは異なる大阪製造業の気質を感じました。また、大阪で出会った関ゼミのみなさんや、中小企業の社長さんなどがとても積極的に圧倒されました。地域経済だけでなく人間性も学ぶことができたと思います。



辻川 洋佑

地域経済学科3年
旭川東栄高校出身



野田 悠希

地域経済学科3年
釧路江南高校出身



奥田仁ゼミ I・II

参加学生数 18 人



奥田 仁
地域経済学科
教授

旭川家具—北海道を代表する加工型地場産業—を学ぶ

研修地：旭川市

●研修目的

①地場産業産地としての旭川家具工業を学ぶ。②訪問聞き取り調査を通じて具体的な企業活動を学ぶとともに、③社会人としてのマナーや対話・聞き取りの力を身につける。④調査内容を取りまとめ、提言を行う。⑤共同活動・生活を通じてゼミ生同士の相互理解を深める。

研修地・日程

9月9日	(株)カンディハウス 旭川家具工業協同組合 旭川家具センター
9月10日	各グループで企業訪問(6グループ×2、計12社) 夜宿舎で工芸指導センターの方々と報告・討論会
9月11日	旭山動物園

写真キャプション

① カンディハウスで企業・業界の概要説明(左は学園大の先輩)。② カンディハウス工場見学。③ カンディハウスショールーム。④ 旭川家具センター見学。⑤ 市工芸指導所、家具工業協同組合の方々のグループ別指導。⑥ 夜の宿に市工芸指導所の方々を迎えて報告・討論会。



●総括

旭川家具工業は北海道の森林資源を背景に、高級欧風家具の産地として発展してきた。

これを地場産業産地としてみた場合、次の二つの特徴がある。一つは、低次加工分野にとどまることが多いといわれる北海道の工業の中にあつて、デザイン性を重視した高次加工の最終消費財を生産しているということである。もう一つは、同じく産業集積が乏しいといわれる北海道にあつて一定数の企業が集積し、「産地」を形成しているということである。

このように旭川の家具工業は地域経済の観点から学ぶべきことは多いが、その現実には時代の変化に適応するための新生と淘汰の繰り返しであり、各企業はそれぞれの特徴と戦略をもって存立しているのである。

こうした状況を学ぶために、学生達は3人一組のグループでみずから企業のアポイントメントをとり聞き取り調査を行った。そしてその成果を報告書とプレゼンテーションにまとめるとともに、学生の立場から見た旭川家具産地への提言も行っている。

このような研究経験は学生の将来の職業生活において有意義なものであったといえるが、これに快く協力していただいた各企業、協同組合、市工芸指導センターの方々に厚く御礼申し上げる次第である。

学生研修記

身近にある地域に根付いた産業



遠藤 佑美
地域経済学科 2年
札幌東商業高校出身

今回私たちは、5大家具産地といわれる旭川へ研修に行きました。旭川家具とは歴史が深く、旭川近郊の豊富な木材を使用した地場産業です。まず初日に旭川家具大手の企業を訪問させて頂き、作業工程やショールームを見学しました。そこで旭川家具産業全体が木材・消費者・後継者を大切にしており、将来を見据えている産業だということを知りました。2日目にはグループに分かれ企業へアポイントを取り、聞き取り調査を行うことで、それぞれの企業の特徴、他企業や異業種との関わり方や、将来展望について等、直接沢山のお話を聞くことができました。その結果、旭川家具企業の減少や知名度不足といった問題を改善する必要があると感じました。

今回の研修で、実際に足を運び直接お話を聞かせて頂いたことは、今後の勉強に役立てることが出来る貴重な経験となりました。

旭川家具産業

旭川は豊富な森林資源を有していることから明治時代末期に多くの家具職人が集まり、現代風なデザインと高級感を重視した家具を生産して主に富裕層からの注目を集めている。現在では日本の五大家具産地の一つとして数えられ、3年に一度世界中のデザイナーたちと優れたデザインを競い合う国際家具デザインコンペティション旭川(IFDA)が行われている。今回の研修では各班に分かれて実際に企業に訪問し、計12社からお話を聞くことができた。各班からの報告からでも旭川家具産業の課題は、知名度の低さである。旭川は五大家具産地の一つともなっているが知名度が低く高級なものが多いため、一部の富裕層にしか需要がないのである。実際に私たちも旭川に訪問するまで家具が有名だということは知らなかったため、Facebookなどのインターネットを利用した情報発信をしていくべきである。



上田 晃嗣
地域経済学科 3年
登別青嶺高校出身





北電火力発電所の現状調査

研修地：伊達市・厚真町

●研修目的

ゼミでは、将来の日本のエネルギー供給のあり方について考えることをテーマとした。しかし、当面は石炭、石油、天然ガスといった化石系エネルギーに頼らざるを得ないことも明らかである。今年度の地域研修は石炭、石油火力発電所について現地学習した。

研修地・日程

9月13日 北海道電力厚真火力発電所
北海道電力伊達火力発電所
北海道電力伊達太陽光発電所
9月14日 有珠山西山火口群

●総括

昨年の地域研修では十勝帯広地区におけるバイオマスエネルギーについて学んだ。今年度のゼミでは、太陽光、風力などの再生可能エネルギーについて引き続き学んできたが、現状においては、石炭、石油、天然ガスなどの化石系エネルギーにその多くを依拠せざるを得ないことも学んだ。この点を、実際に火力発電所を見学することによって確認することが今回の地域研修の目的であった。厚真火力発電所は石炭火力であるが、広大な敷地に大量の輸入炭が積み重ねられている様子、そしてその輸入先がオーストラリア、アメリカ、インドネシアであり、微粉炭にして混合調整していることなど、石炭火力とはいえ、なかなか複雑である。また石油による伊達火力の場合、室蘭からパイプラインで伊達まで輸送して燃焼させている事実など、現地に行かなければ分からないことであり、学生も感心することしきりである。併設された太陽光発電所は、当日あいにくのくもり空で発電量がわずかであったが、太陽光発電の実態の一端を知ることになったと言える。全体の研修行程がややタイトになったのではないかと反省するところである。

学生研修記

厚真石炭火力発電所を見て



小山田 尚裕
経済学科2年
岩見沢東高校出身

私たち小坂ゼミは、苫小牧東部厚真発電所で石炭を使った発電方法を学びました。現在、石炭発電では、主にオーストラリアなど海外から輸入した海外炭を使用しています。厚真発電所では、海外炭が採れた国、輸入時期によって沢山の山に分かれて置かれています。とても多くの山だったのが印象的でした。石炭は輸入コストが低いというメリットがありますが、デメリットもあります。まず、石炭は永久に採れるわけではないので、将来の資源枯渇の恐れがあるということです。また、石炭を燃焼させることに伴う排出ガスに含まれる環境汚染物質の問題です。

厚真発電所を訪れ、普段知ることのできない発電所における工夫の数々、それに伴う発電所の作業員の方々の苦労などについて学ぶことができ、とても貴重な体験となりました。今後も、火力発電だけでなく、様々な発電方法についても学んでいきたいと思えます。

伊達発電所：石油火力発電とソーラー発電



三浦 貴史
経済学科2年
札幌白石高校出身

伊達発電所では、石油火力発電所とソーラー発電所を見学しました。発電所の屋上から伊達市内や有珠山、太平洋を一望でき、とてもよい景色だったことが印象に残っています。また、燃料である石油を輸送するパイプラインを見ることもできました。さらに、新エネルギーの導入としてソーラー発電も見学しました。ソーラー発電所はとにかく広く、札幌ドーム二つ分もあることに驚きました。発電所内にはパネルでの発電量がリアルタイムで表示される測定器があり、見学者には分かりやすい施設となっていました。

今回は火力発電所とソーラー発電について学びましたが、エネルギー問題として、原子力発電は避けられません。北海道でも、泊原子力発電所が停止していますが、その中で道内の電力需要に対して火力発電はどうあるべきなのか、また新エネルギーの導入など、北海道電力の職員の方たちの説明を聞いて、私たちにできることは何か、改めて考えさせられる良い機会となりました。

写真キャプション

- ① 廃プラスチック(発電原料)の山。② 質疑風景。
③ ソーラー発電の発電量。④ 北電の方の説明。⑤
ソーラーパネルの前で。⑥ 広大なソーラー発電所。



川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数17人(院生1人)



川村 雅則

経済学科
准教授



●川村ゼミ報告書『学生アルバイト白書2013』

①若者の労働と生活、②学生アルバイトの実態

研修地：札幌市

●研修目的

●今年、若年層の労働と生活をメインテーマに取り上げ、①定時制高校に通う生徒の就職等の問題、②若年労働者にみられる長時間労働や非正規雇用問題、さらに、③ここ数年注目を集める生活保護問題という3つを具体的な調査研究テーマとした。文献研究のほか、進路指導にあたる教員からの聞き取り(定時制高校)、労働組合専従者や組合員からの聞き取りを行った。また、労組主催の学習会やイベントに参加し、労働組合との交流を図った。

●学生アルバイト調査と『白書』づくりに取り組んだ。現在アルバイトをしている北海学園大学の学生を対象に、アンケート(有効回答213人)と聞き取り(同30人)を行い、学生バイトにみられる違法行為やトラブルの把握と、ワークルールなどを活用した、問題解決の方法を考えた。

●総括

①若年層の労働と生活調査のうち、まず定時制高校で聞いた話は、就職問題における階層性を意識させられる内容だった。入学者のうち半数近くが卒業までにやめてしまうこと(他校への移動を含む)。一人親世帯が多く、生活保護世帯も少なくないこと。保護者の失業・病気による生活困窮が生徒の就学や生活に影響を与えており、進路は、進学や正社員での就職の一方で、アルバイトの継続や進路未定のままでの卒業も多いことなど、である。

次に、労働組合・労働者からの聞き取りでは、労組の受けた相談ケースだからという事情はあるにせよ、過労死ラインをゆうに超えるほどの長時間労働で、しかも残業代は全く支給されないというケースや、正社員に混じって同じラインで同じ仕事に従事するけれども、給与は3分の1程度で昇給もなく、有期雇用で働く非正規労働者など、調査協力者が思うように見つからず十分な数の聞き取りはできなかったものの、若年労働の一端を垣間見ることが出来た。



労組・チカホイベントで報告

学生研修記

泣き寝入りしないためのワークルール

川村ゼミ1では、北海学園大学の学生を対象にアルバイトの実態調査を行い、その結果を『アルバイト白書』にまとめました。

調査でまず驚いたことは、アルバイトをしている学生の半数以上が、1日5時間以上働いていたことです。学業に支障が出ているという学生も少なくありませんでした。さらに、アルバイトへの不満は思いのほか多く、「サービス残業」や「割増分の賃金が支払われない」など違法行為も訴えられていました。学生バイトとはいえ労働者であるのに、ワークルールを知らないと、問題が起きても泣き寝入りせざるを得ません。自分を守るためにもワークルールを学び、問題解決の選択肢を増やすことが大切だと感じました。

まずは『アルバイト白書』を読んでもらい、就職する前に「働くこと」「労働」について考えてみて欲しいと思います。

学生にも身近になりつつある「ブラック」

僕たちのゼミでは、労働問題について勉強してきました。とくに、最近よく聞かれる「ブラック企業」問題が多く取り上げられました。前期のゼミで読んだ本の中では、森岡孝二編『就活とブラック企業—現代の若者の働きかた事情』(岩波ブックレット)という本が印象深く、ブラック企業の弊害、そしてそれを避ける方法や立ち向かう方法を学ぶことができました。

後期のゼミは、こうした勉強をふまえ、学生アルバイトの調査を行いました。すると、アンケートや聞き取りを通じて明らかになったのは、学生アルバイトにも、サービス残業や賃金未払い、パワハラ的な扱いを受けるなどブラック企業のような問題がみられたことです。僕たちと無縁の問題ではなかったのだと思いました。労働環境をより良くするにはどうすればいいかを考えさせられた調査活動でした。



藤原 良太
経済学科2年
創路江南高校出身



宮下 雄一
経済学科2年
苫小牧東高校出身

研修地・日程

前期

若者の労働と生活に関する文献研究。主なテーマは、若者と就職、ブラック企業と若者労働、若者と社会保障など。

夏期休暇(前後を含む)

- 定時制高校5校を訪問し、進路指導の担当教員から聞き取り。
- 労働組合(「道労連」)を複数回訪問し、専従者から聞き取り。
- 労働組合から紹介された若年労働者5人からの聞き取り。

後期

- 9月から学生アルバイト調査に着手。調査の結果をまとめ、『白書』づくりに取り組む(ゼミⅠ)。
- インターゼミナール大会参加に向けた論文執筆作業を開始(ゼミⅡ)。
- 労働者調査や学生アルバイト調査の結果を、労働組合(「道労連」)の主催するイベント(9月29日)で報告。
- 労働組合(「札幌地域労組」)の主催する学習会などに参加。
- 11月29日開催の公開授業で、学生アルバイト調査の結果を報告(ゼミⅠ)。
- 12月7、8日に関東学院大学で開催されたインターゼミナール大会に参加し、「若者の労働と社会保障」をテーマに分科会で討論を行う(ゼミⅡ)。



1



2



3



労組・テカイベントに参加



インゼミ大会 (@関東学院大学) に参加



インゼミ分科会の風景



討論を終えて分科会の両ゼミで記念撮影

上記の調査結果を、(1)9月29日、地下歩行空間で開催された労働組合主催のイベント（「ユニオンフェア」）で報告。(2)論文にまとめて、12月7、8日関東学院大学で開催されたインターゼミナール大会に参加。「若者の労働と社会保障」というテーマで討論。一年間の勉強の成果を發揮した。

②学生アルバイト調査と『白書』づくりは、今年で3年目になる。大学生のキャンパスライフのうち少なからぬ部分がアルバイト生活に費やされているが、相変わらず、アルバイトにおけるワークルールの軽視が目立つ。「定番」の(?)不払い労働にはじまり、仕事上のミスへのペナルティ、商品の買い取り・ノルマ、急な呼び出し・シフトの変更、長時間労働・残業、パワハラ・セクハラなどなど、である。今年は、聞き取り調査に力を入れ、アルバイト実態や問題の掘り起こしに力を入れた。結果の詳細は『白書』を参照されたい。→<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index>

11月29日に開催した公開授業「これでいいのか、学生バイト!! 大学生のアルバイトを考える」で、アルバイト調査結果を学生自身が報告した。助言講師に「札幌地域労組」鈴木一書記長を招く。



札幌地域労組 鈴木一書記長を招いての公開授業



公開授業で報告

学生研修記

定時制高校の現状を知って



千葉 雅己
経済学科3年
石狩南高校出身

私たちは、若者と就職というテーマで定時制高校の就職問題に取り組みました。就職問題で不利な立場にあるのが定時制高校の生徒たちだと思ったからです。定時制高校5校を訪問して、主に進路指導の先生から聞き取りを行いました。調査でわかったのは、全日制の生徒と比べ、経済的に困窮していたり家族関係での不利を抱えている生徒が多いということです。私自身、この調査活動に取り組むまで定時制高校についてはほとんど何も知らず、ほぼ同年代の若者にこんなにも格差があることに辛い気持ちになりました。

また、論文を書くにあたって、定時制高校の調査や研究があまり行われていないことには驚きました。経済的理由など本人ではどうすることもできない理由で就職格差が生まれている現状を是正すべく、定時制高校の調査を進め、制度・政策的な支援を行うべきだと思いました。

労組・労働者からの聞き取りで学んだもの

若年労働者の労働実態を学ぶため、労働組合の専従者と、組合員（24～34歳の労働者）5人から聞き取りを行いました。

老若男女問わず、また、長時間労働/パワハラ・セクハラ/賃金・残業未払いなど様々な内容の相談が組合には寄せられているそうです。1ヶ月に180時間以上のサービス残業を強いられたケース（パン屋）、1日14～16時間という長時間働かされ、時給換算すると給与は400円だったというケース（美容師）など、想像を超える働かされ方でした。

労使関係は、建前上は対等と言われていますが、実際の労働者は、多少無理をしても使用者の指示に従い、不満や違法行為があってもそれを指摘するのは困難です。概して、言いなりになりがちだと思いました。高校生・大学生のうちから労働法に関する知識を深め、そうした問題への対処方法を学ぶ必要性を強く感じました。

写真キャプション

①～③ 労組等での聞き取り。④ 定時制高校での聞き取り。⑤⑥ 介護労働者・労組学習会に参加。⑦⑧ 学内でアンケート調査票の配布。⑨ 『アルバイト白書』の構成を検討。



7



8



4



5



6



9

小田清ゼミ I・II

参加学生数 31 人



小田 清
地域経済学科
教授

自然環境に優しい地域づくりを学ぶ

研修地：苫前町・旭川市

●研修目的

苫前町は大陸からの季節風の通り道であり、その強風に悩まされてきた。この厄介者を、北海道で最初に地域おこしに生かしたのが苫前町である。また、旭山動物園は野生生物の保護に熱心で、両地域で自然に優しい地域づくりを学ぶことが目的である。

研修地・日程

9月12日 苫前町公民館
三毛別熊事件跡地
上平・夕陽ヶ丘ウインドファーム
9月13日 苫前町郷土資料館
旭川市・旭山動物園

●総括

1日目は、北海道ではじめて、自治体が風力発電を行った苫前町を訪問した。苫前町が全国的に知られるようになったのは、1915（大正4）年に開拓地・三毛別で発生した日本最大の「熊害（ゆうがい）」事件で、開拓民7名が死亡した。現在、この場所は当時の開拓民の生活を復元し、事件を紹介している。風力発電は、自治体と民間合わせて42基、約5.3万kwと全道一の出力を誇っており、「風の町」「風車の町」として、町長は全国風力発電設置自治体の会長を務めている。

2日目の「旭山動物園」訪問では、単なる「展示動物園」を見るのではなく、園内に配置されている「ボルネオ象」を守るための「募金型自動販売機」に注目した。その自動販売機を利用すると、自動的に「ボルネオ募金」がなされる仕組みで、坂東園長の発案である。現在、募金によって、ボルネオに動物保護の施設が建設されている。

両日ともに、日常的に触れることのない環境に優しい地域づくりを学ぶことができ、研修目的を十分に果たしたと思う。

学生研修記

苫前町で自然エネ開発と開拓の史を学ぶ



西尾 匡人
地域経済学科 2年
北海道出身

今回の地域研修では、苫前町の役場の方から、風力発電とはどのようなものなのか、どう作られているかなどについて講話を受けました。ウインドファーム（集合型大規模風力発電施設）の見学では約3.97haの広大な土地で5万600kwを発電していると聞いて驚き、風力発電はすごいことを知りました。2日目に訪れた苫前町郷土資料館には、町の歴史がふんだんに詰まっておりました。数えきれないほどの農具、当時の住宅、動物の剥製などが展示されており、苫前町の歴史を良く知ることができました。

今回の研修を通して苫前町が目指す、環境に配慮した自然エネルギー開発と町の歴史を良く知ることができ、大変有意義な研修でした。

クリーンなエネルギーに生きる町に学ぶ



岩本 泰輔
地域経済学科 3年
北海道出身

私たちは今回の地域研修で、苫前町のエネルギー開発と発電事業について学んできました。苫前町は風が強いという地域性を生かし、クリーンで持続可能なエネルギーとして風力発電を推進しています。その電力を町のメイン電力にすることは難しいのですが、夜間照明や公共施設等に使用し、余った電力を北電に売却するなど、有効利用しています。

また、風の町として観光にも力を入れ、ウインドパークなどの開設により、観光産業を活気づけています。温泉での懇親会では、2年生との学生生活の情報交換などを共有でき、充実した地域研修となりました。

写真キャプション

- ① 全員で苫前町企画振興課 高田係長の講話を聞く。
- ② 受講風景。
- ③ 熊事件現場（保存）前にて。
- ④ 三毛別熊事件の状況。
- ⑤ 羽根が事故で落下した発電機。
- ⑥ 苫前町郷土資料館前にて。
- ⑦⑧ 旭山動物園 募金型自動販売機とその説明。



1



2



3



4



5



6



7



8

佐藤信ゼミ I・II

参加学生数 30 人



佐藤 信
地域経済学科
教授

北海道における再生可能エネルギーの実態と可能性

研修地：伊達市・寿都町

◎研修目的

本研修では、北海道における再生可能エネルギーの可能性を知るために、次世代エネルギーパークの拠点地域になっている伊達市と風力発電で知られる寿都町を訪問し、既存の発電施設とソーラーや風力発電、バイオマス施設を視察、現在の特徴や問題点、課題を学ぶこととした。

研修地・日程

8月7日	虻田水力発電所 伊達市大滝村木質ペレット工場
8月8日	バイオジェール燃料製造工場 伊達火力発電所・ソーラー発電所
8月9日	寿都町風力発電所

写真キャプション

① 虻田水力発電所の遠景。② 虻田水力発電所で説明をうける。③ 虻田水力発電所内のタービン。④ 木質ペレット工場の原材料。⑤ 製品となった木質ペレット。⑥ 伊達ソーラーパネル全景。⑦ 寿都町風力発電施設の遠景。



◎総括

将来の北海道において、再生可能エネルギーはどれくらい普及可能か。そして、それを制約する条件は何か。本ゼミでは、以上の課題をもちつつ、地域研修では伊達市を拠点として、様々な発電施設とバイオマス工場を視察することとした。

虻田水力発電所は洞爺湖からの湖水を利用した中水力発電である。70年以上の歴史を有する施設の威容さ、維持管理の工夫を学ぶことができた。

木質ペレット工場は、旧大滝村の森林資源を活用した取り組みであるが、製造原価が高く、一般家庭などへの暖房にはまだまだ課題が残ることが分かった。

伊達火力発電所では、隣接するソーラー発電もあわせて視察した。ソーラー発電は天候のわずかな変化によって発電量が大きく変化する。当日も雨天で、発電量はわずかであった。最終日には、寿都町の風力発電施設を見学した。その大きさに学生たちは驚いているようであった。

ゼミ I・II との合同研修であったが、特に3年生は、訪問先のアポイントメントをとり、ヒアリングを事前に準備するなど精力的に取り組んでいた。2年生は写真撮影と記録が担当であったが、上級生に接することで、良い体験ができたと思う。

学生研修記

北海道発電所ツアー2013

私たちは、ゼミ I・II 合同で北海道内の発電所を中心に視察してきました。まず、虻田水力発電所を訪れ、とてつもなく急な階段を上り下りしながら、水力発電の現状を教わり、北海道は水力発電に適した環境であることを知りました。翌日は伊達火力発電所へ。火力発電所の中は暑い！ただ立っているだけで、汗が噴き出しました。ですが、発電所の屋上からみる海の景色はとてもきれいでした。火力発電所の隣は太陽光発電が行われており、びっしりとソーラーパネルが並べられていました。残念なことに、見学当日はあまり天気にも恵まれてなく、発電量は少なめでした。太陽さままでです。

最終日は風力発電の寿都町です。風車は予想以上に大きくてグルグル回っていました。風力発電が行われているだけあって、風はいつも強めだそうです。研修は3日で終了しましたが、これからは節電に協力しようと思いました。

地域のエネルギー供給

今年の地域研修では、北海道における再生可能エネルギーの普及と課題を検証するため、発電所と各種施設に赴きました。2泊3日ではありましたが、風力、水力、バイオマス、太陽光、木質ペレットについて、現地で関係者から直接話を聞くことができました。その結果、水力発電やバイオマスなどでは、立地確保や建設費用など初期投資が高くなることを知ることができました。

研修では、数種類の再生可能エネルギーについて分担して調べるため、各グループをつくって準備をしました。訪問先も一つではなく、複数になります。再生可能エネルギーと一口に言っても、それぞれに利点や課題があり、それらを比較して知ることができました。

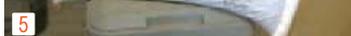
私たちのゼミでは、再生可能エネルギーという大きな括りではなく、地域にねざしたエネルギー需給の形を少しでも知りえたのではないかと思います。



佐藤 裕太
地域経済学科 2年
北見緑陵高校出身



石名 楓
地域経済学科 3年
札幌東陵高校出身



高原一隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 25人



高原 一隆

地域経済学科
教授

食関連産業による地域活性化と食産業ネットワーク

研修地：十勝地域（帯広市・音更町・芽室町・清水町）

●研修目的

現在、地域の資源を見直し、それを地域の中で経済的に循環させることによって地域経済活性化とすすめる方法が注目を浴びている。十勝において農業と関連産業がどのように経済循環する試みがなされ、どのような経済ネットワークが形成されているかを確認する。

研修地・日程

- 9月1日 帯広畜産大学
北の屋台
- 9月2日 帯広市役所
株アグリシステム、
株山本忠信商店
- 9月3日 とちか財団
農業研究機構（芽室町）
満寿屋、株ホクコー、
柳月（音更町）
ご当地グルメのレストラン等

写真キャプション

- ① 帯広市役所でフードクラスター十勝プロジェクトの説明を受ける、大学の講義より真剣な表情に注目!!!
- ② 株山本忠信商店の小麦袋、地産地消の証明? ③ 株山本忠信商店の製粉工場“夢 Mill”の前で。④ 芽室町の農業研究機構で小麦の話、小麦も奥が深い! ⑤ 道下農場にて、十勝には優れた“農業経営者”が多いよ。⑥ 「牛玉ステーキ丼」で十勝清水を元気に!! 一度食べてみて、おいしいよ!



●総括

経済成長優先社会の中で、農業は「衰退産業」との位置づけさえされていたが、改めて地域経済を見るならば、農業だけでなく関連産業の多様な広がりが見られる。

北海道そしてとりわけ十勝地域は全国でも最大の農業及び関連産業が地域の基盤産業となっており、こうした産業の発展こそ地域経済活性化のポイントである。

しかしそれらの主体がどのように経済ネットワークを構築し地域内外と経済循環しているかが活性化には何より重要である。今回の地域研修は、食関連産業が地域内でどのようなネットワークを形成しているかをゼミⅡは小麦生産－小麦研究・知的所有権－加工（製粉）－加工（パン、菓子、餃子の皮）といったネットワークのそれぞれの主体にヒアリングし、その実態を明らかにすることにあつた。ゼミⅠはご当地グルメが生産者－事務局－飲食店－消費者がどのようなネットワークを構築しているかを明らかにすることであつた。

様々な経済主体へのヒアリングを通して、改めて経済的ネットワークの重要性を理解することができた。しかし、移出産業も含めた総合的な地域経済システムの構築は今後の大きな課題として残されている。

学生研修記

食で地域活性化



阿部 圭一郎

地域経済学科2年
函館大学付属有斗高校出身

十勝は食の資源がとても豊富な地域でありながら、食料品の加工が弱いという課題があり、この課題を小麦に焦点を置き調べました。アグリシステム株式会社では、生産者から直接小麦を仕入れ、自社で製粉をし、誰が作った小麦か分かるようにして消費者へ流通させています。

農家の顔が分かり安心安全であり、地域内で付加価値を付けて流通させることで地域活性化にも繋がります。このような取り組みがたくさん行われると、課題が解決されると思います。更に、十勝の清水町にある十勝清水牛玉ステーキ丼について調べてきました。これは清水町といえば〇〇というものがない為に開発されたご当地グルメです。とても美味しいので皆さん是非清水町に行って食べてみてください!!

十勝地域における小麦のネットワーク

私たち高原ゼミは9月1日～4日までの間に、十勝地域における、小麦のネットワークを学ぶために十勝を訪れました。地域研修が始まる前に事前として、北海道庁の方や江別製粉の方のお話を聞くことができるという機会に恵まれ、今回の研修がより濃いものになりました。十勝では帯広畜産大学の仙北谷教授から十勝地域における食産業のお話を聞き、小麦を生産している農家さん、小麦の生産・販売、新しい小麦の開発、小麦を使った製品を作る会社など、小麦に関するたくさんの企業様や、団体様のところでお話を伺い、小麦に対する思いなど資料ではわからない「気持ち」を聞くことができた事が今回の一番の学習だと思います。教室で教科書を広げているだけでは、決して理解することができないことを勉強でき、自分の将来のやりたいことが見えた地域研修になりました。



前田 明宏

地域経済学科3年
札幌稲雲高校出身





旭川市における若者就労支援の実態と課題

研修地：旭川市

●研修目的

就職活動における学校と職場との連携が崩れた現在、若者の就労支援は労働政策の重要な課題になった。そこで、旭川市を事例に未就労の若者の支援を民間団体、自治体、学校、ハローワーク、職業訓練機関がどのような連携のもとで行っているのか、考察したいと考えた。

研修地・日程

9月17日	ポリテクセンター旭川 ハローワーク旭川 北海道立旭川工業高校定時制
9月18日	北海道立旭川技術専門学院 ジョブカフェ あさひかわ若者サポートステーション
9月19日	旭川市経済観光部経済総務課雇用 労政係

●総括

サポートステーション（以下、サポステ）に限ってその活動を紹介する。旭川市のサポステは、厚生労働省から労働者協同組合が委託を受けており、主には相談事業と学校連携事業を行っている。

相談事業は、文字通り若者やその家族から就職等の相談を受けるものである。2012年の登録者125名のうち81名の進路が決定しており、個別の相談者に対する伴走型の支援の効果がある事が分かる。ただ、正規雇用についたものは18名と少なく、今後の課題である。その一方で相談から職業訓練機関へ16名が進んでおり、ワンストップサービスとしての機能を果たしている。

学校連携事業（アウトリーチ事業）では、旭川工業高校定時制と連携し、月に2回「サポステの時間」を作って学生の面談を行い、支援を行っている。サポステ職員と一緒に清掃等の作業を行う就労支援も行っている。このよう中で複雑な家庭環境等に配慮しながら支援を行うケースもある。在学生のアルバイトの就業率もサポステとの連携を取ることによって高まっている。

このような支援もサポステと学校、職業訓練機関、ハローワークとの連携の上に成り立っているのである。今後の課題としては市役所の行っている新卒無業者への支援との連携やインターンを受け入れる地域企業の課題等があげられる。

学生研修記

サポステの学校連携推進事業の成果



岩崎 翔

地域経済学科3年
神奈川県逗葉高校出身

地域研修では就労支援を行っている行政機関、学校、民間団体等を訪問したが特に注目すべき地域若者サポートステーション（以下「サポステ」）と工業高校定時制の連携の成果について分かったことを述べる。

サポステは学校訪問し、生徒から就労に関する相談等を受け付け内容に応じた個別支援や、自己肯定感や就労意識を高めるため就労体験を行う等の支援をしている。

担当者から「就労体験を通じ、自分から話さなかった生徒が自分から職場関係者に話しかけるようになった。」という話を伺い、就労体験を通じて生徒が成長し就労へ繋がる過程が見えた。また頂いた資料を見ると平成23年5月の有職率（アルバイト含む）が50.5%なのに対し連携開始後の平成25年5月の有職率は59.6%と9.1%上がっており、サポステと学校の連携が生徒の就労意識向上に繋がっていることが分かった。

改めて生徒一人ひとりにきめ細かく支援する事の重要性を認識した。

旭川市における若年者就職支援



平中 秀智

地域経済学科3年
月形高校出身

私たちは、旭川市に2泊3日の研修で5か所の支援機関を訪れ、旭川市における若年者の就職状況、求職者への支援内容、成果、支援機関ネットワークの実態を調査してきました。旭川市では、若年者を各機関が就職までに漕ぎ着けるために、単に求人のある企業を紹介するだけではなく、専門的な資格の取得や市内へのインターンや模擬面接などを各機関が若年者に対し、支援を行っている現状がありました。特に若者サポートステーションでは、就労に自信がない人に向け、個人の面談や就労体験で就労に対するメンタルケアも行って就職へと繋げる支援を行い、平成24年度では登録者の約2/3の進路が決定しています。

私が感じたことは、個人の努力だけではなく各機関の支援の連携があるからこそ、就職できる若者がいるということ、各機関の連携支援の重要性を実感しました。

写真キャプション

①② ポリテク金属加工科実習の様子。③ ポリテク機械加工科課題作品。④ ハローワークの方々。⑤ 技専色彩デザイン科の生徒作品。⑥ 技専建築技術科実習の様子。



西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数 26 人



西村 宣彦

地域経済学科
准教授

環境未来都市・下川町：その魅力と可能性を探る

研修地：下川町

●研修目的

地域資源の森林を余すところなく活用することにより、地域経済の活性化と地域社会の再生を図るとともに、地球環境問題の改善に貢献することで、道内唯一の「環境未来都市」に選ばれた下川町の挑戦の数々と、その挑戦スピリットに触れ、学ぶことが研修の目的である。

研修地・日程

- 8月27日 NPO森の生活代表・麻生翼さんのレクチャー。森林生態・林積・間伐の意義等を学ぶ体験プログラムに参加。
夕食（カレーライス）づくり、反省ミーティング。
- 8月28日 下川町役場環境未来都市推進課長・長岡哲郎さんのレクチャー。産業クラスター推進部次長・徳間和彦さんのレクチャー。木質バイオマスボイラー、木質チップ加工場、エッセンシャルオイル蒸留施設（フブの森）見学。
一の橋地区「地域食堂」で昼食、地域の高齢者の方を囲んでヒアリング。バイオマスヴィレッジ（新しい公営住宅、バイオマスボイラー）見学。地域おこし協力隊＋集落支援員の指導による地域づくり活動体験（A班：ブルーベリー苗植え、B班：バイオマスボイラー清掃とミニトマト収穫、C班：クマザサ刈りと粉末加工）。BBQ準備、BBQ交流会。反省ミーティング。
- 8月29日 役場会議室を借りて「まとめのゼミ」、研修成果発表会。

写真キャプション

- ① 「NPO森の生活」 麻生代表のレクチャーを聴く。
- ② 一の橋地区にお住まいの高齢者と交流。③ 一の橋バイオマスヴィレッジ内を見学。④ 最終日は役場の会議室を借りてまとめのゼミ。⑤ 役場幹部の前で研修成果の発表会。



●総括

下川町は人口3,500人の小さな町である。基幹産業の林業・鋸業の衰退、鉄道の廃線等により、高齢化と人口減が進行するが、地域資源の森林を持続可能な形で利用することにより、地域経済の活性化と社会の再生を目指すとともに、地球環境問題の改善にも寄与する同町の取り組みは、「内発的発展モデル」として全国の注目を集め、道内で唯一の「環境未来都市」にも選定されている。研修ではまず実際に森の中に入り、木や森を肌で体感するとともに、林積計算ゲームなどを通じて、木材価格低迷下で木や森の付加価値を高めることの重要性を学んだ。2日目はそうした取り組みの1つ、流木や林地残材を処理した木質チップを燃焼させて得た熱（温水）を、公共施設等に供給するバイオマスボイラー施設を視察し、「過疎地こそ日本の最先端」を目の当たりにした。午後は同町東部にある人口約100人の一の橋地区を訪ね、同地区で集住化とバイオマス利用を進めるために整備された新しい公営住宅を見学するとともに、同地区にお住まいの高齢者の方からお話を伺った。また同地区の活性化に取り組む地域おこし協力隊の指導で、熊笹狩りなどの地域づくり活動に参加させていただき、彼らの活動の一端に触れさせていただいた。お世話になったすべての皆様に心より御礼申し上げたい。

学生研修記

木質バイオマスを武器に発展を目指す下川町



岩本 隆希
地域経済学科 2年
石狩南高校出身

地域研修で訪問し、下川町の印象が大きく変わりました。最初は何もない過疎地域という印象でしたが、実際に訪れてみると、1ターンでやって来た多くの移住者が、下川町のことを考え、支えていこうとしており、一人一人の気持ちが伝わる熱いまちでした。地元の人、移住者、役場職員が互いに交流し、人と人とのつながりの強さがこの町の魅力であると感じました。下川町では地域の資源を有効活用し、地域の中で無駄なく循環させていこうとしており、さらに木質バイオマスの利用によって捻出したお金を、子育て支援に回すなど、町の未来を見据えた取り組みをしていました。木質バイオマスを活用する技術は、森林資源にこだわる下川町ならではのものと思うので、この技術をはじめ下川町の取り組みを全国に広く知ってもらおうことが、今後の下川町の発展にとって大切ではないかと思いました。

「また来たい」と感じた、ひとが輝くまち



高野 詩菜
地域経済学科 3年
大森高校出身

地域研修先が下川町に決定するまで、私は「環境未来都市」であることも知らず、町の9割が森林なんて想像もつかなかった。今回こうして下川町を訪れたことは、私にとってとても大きな経験になったと感じる。外部から移住してきた方をはじめ、ずっとこの地域に住み続けている方や役所の方まで、様々な方に話をお伺いし、様々な目線で見つめた。そこで私が強く感じたのは、人とのつながりを大切にしている町であること。地域住民同士、移住者同士。さらに、地域住民と移住者のつながり、そして役所の方の地域住民に向けられた真摯な姿勢。一人一人が真剣にこの町を考えていた。まさに「ひとが輝く」町であった。2泊3日の研修を終えて、私が最後に伝えた一言は、「また来ます」。またこの下川町に来たい。今度は話を聞くだけでなく、力になりたい。とても有意義な2泊3日の研修だった。



平野研ゼミ I

参加学生数 11 人



平野 研
地域経済学科
准教授

大学におけるフェアトレード活動の実践と課題

研修地：札幌市

●研修目的

フェアトレードのキャンペーンを大学祭で行うことで、学生へのフェアトレード認知を広げる取り組みを行う。単なる商品販売にとどまらず、フェアトレードの仕組みや、生産者の現状についてのパネルを作成することによって、調査し、プレゼンテーションをしていく。ゼミでの学習成果を、店舗運営を通じて発揮するとともに、その課題を経験的に学ぶ機会とすることが目的である。

研修地・日程

北海学園大学「十月祭」豊平校舎会場
10月12日 フェアトレードカフェ出店
10月13日 フェアトレードカフェ出店
10月14日 フェアトレードカフェ出店

写真キャプション

① フェアトレードカレーの調理風景。② フェアトレードコーヒー。③ カフェ正面。④ カフェ・イートインコーナー。⑤ フェアトレード商品の物販。



●総括

本学の大学祭「十月祭」のフェアトレードカフェでは、フェアトレード商品の販売と、フェアトレード食材を使用したカフェメニューの提供を行った。商品の仕入れやメニューの決定など、ゼミ内で分担して行った。運営としては、一定の成果をあげることができた。

単に販売を行うだけではなく、フェアトレードとは何か、その仕組みについて知ってもらい、ということも重要な目標である。そのため、パネルやポップを作成し、商品を手に取った際に生産について考えたり、食材を通じてフェアトレードを感じてもらい機会となるように工夫をした。ゼミやその他の時間を使い事前準備に多くの時間を割いた。ゼミでの学習成果を活かすとともに、様々な課題も見えてきた。

メニューにおいては、フェアトレード食材だけでは十分なメニューが提供できないことが判明し、北海道の有機食材など地産地消とのコラボレーションでメニューを考えていくこととなった。また、パネルやポップ、映像の提示がスペースや大学祭実行委員会からの規制の中で十分にできない、という問題も生じた。急遽、市民団体などから立て看板などを借りたが予定していたものが十分に達成できなかったと言いがたい状態であった。さらには、本学の大学祭は薄利多売で、市場としても外部の集客にも消極的な小規模なパイであり、過当競争の傾向がある。フェアトレード商品はそのような市場では価格差のため、困難となる。環境や国際問題、地域問題も視野に入れた「倫理的消費」を基盤とした市場の重要性について、考えさせられる結果となった。

これらは北海道でのフェアトレード拡大の課題とも同じであり、大学祭において規模の差はあるものの、実体験をもとに、参加学生自身がこのような課題について考えたということでは大きな意義があったと言える。

学生研修記

実践で学ぶフェアトレード

私たち平野ゼミはフェアトレードについて研究しています。

今年の地域研修では北海学園の大学で毎年開催されている 10 月祭でフェアトレードについて学んだことを実践的に行うことを目的として「フェアトレードカフェ」というブースを出店しました。ここでは発展途上国で生産された飲食物や雑貨の委託販売も行いました。当ゼミはこれら全ての商品の発注書から販売までを行い、利益をあげることができました。ここで学んだことはいかに発展途上国の国々が貿易で不利な立場にいるか、その中で利益を出すことの困難さを身をもって体験することができたことです。同じ商品を販売する他団体があるとき、フェアトレード商品では価格競争において勝ち目はありません。そのため同じ原材料で別の商品を生産するなどの日価格競争に持ち込む、これらの行動は発展途上国の貿易の縮図になっているように感じました。

フェアトレードの啓発活動としての十月祭

僕たち平野ゼミは、十月祭に「フェアトレード・カフェ」という名で出店し地域研修を行いました。十月祭という多くの人々が訪れるイベントで出店し、フェアトレードの認知度を上げるということと出店による利益で間接的に発展途上国の生産者を支援するのが狙いでした。フェアトレードの商品を使い、カレーやコーヒーなどの食べ物、途上国の生産者が作った手工芸品などの雑貨を販売しました。客層は僕たちの世代より、年配や子供のお客の方が多く、ほとんどが学生の十月祭という場でフェアトレード商品を販売し、かつ利益を出すことはとても難しかったです。

フェアトレード知ってもらうためにゼミメンバーがフェアトレードについて理解しなければなりませんが、個人個人の理解が薄かったということが一番の反省点だと感じました。今回の経験・反省点を次回の地域研修に活かしていきたいです。



高山 瑛太郎
地域経済学科 2 年
江別高校出身



毛利 新之介
地域経済学科 2 年
江別高校出身

平野研ゼミⅡ

参加学生数3人



平野 研
地域経済学科
准教授

市民運動におけるフェアトレード活動の実践と課題

研修地：札幌市

●研修目的

札幌市では日本最大のフェアトレード野外イベントが毎年行われている。フェアトレード・イベントを通じて、途上国の抱える様々な問題を認識するとともに、北海道におけるフェアトレード活動に関わる団体、店そして市民と交流によって現在の消費者運動のあり方について学ぶ。実践を通じて、フェアトレードの課題について自ら気づき考察していく機会としていくことが研修の目的である。

研修地・日程

「フェアトレードフェスタ2013 in さっぽろ」 札幌市大通公園8丁目会場	
6月29日	ステージトークショー企画 ステージライブ企画 その他ステージ企画
6月30日	ステージパフォーマンス企画 ファッションショー企画 その他ステージ企画

写真キャプション

① テント設置。② お祭りブース企画：射的。③ お祭りブース企画：輪投げ。④ フェアトレードショップにて。⑤ マスコミ取材対応。⑥ フェアトレードブースにてボランティア。



●総括

フェアトレードフェスタへの実行委員としての参加は、4月から実行委員会議で打ち合わせを重ね、ステージ企画・運営を担当した。ステージライブでは、ステージ機材の調達から、出演者への連絡、調整を行い、ステージトークショーでは講演者たちとテーマを考え、配置などを提案した。ファッションショー企画では、他大学の学生と協力して、企画を実現した。

フェアトレードの認知の高まりから、札幌市内の大学でもフェアトレードへ関心を寄せる学生が増え、今回のフェアトレードフェスタでは、大学生の参加が目立ち、情報の交換や交流を深めることができた。その一方で、学生から社会人と年齢や職業の異なる人々の集まる市民運動において、情報共有の難しさ、組織運営の困難さについて痛感する事例も多くあり、市民運動の課題について身を以て経験し、事後の議論などで話し合う機会にもつながった。

ゼミ1から学んできたフェアトレードについて実践的に経験することによって、それぞれが問題を意識し、それぞれの視点で考察をしていく取り組みができたと思う。教科書や文献を通じた学びに加え、会議などの場で、組織の人たちに自らの考えを伝え、実行に移していく経験は貴重な経験になった。

学生研修記

地域研修を終えて

昨年同様、地域研修でフェアトレードフェスタに実行委員として参加しました。昨年は、初めての経験であり上手いきませんでした。しかし今年は去年の反省を活かし、様々なことを改善しました。私はステージでのファッションショーを企画、運営しました。フェアトレードといえば、チョコレート、コーヒーなどの食品に目が行きがちですが、おしゃれな服や靴などのフェアトレード商品をたくさんの人に知ってもらいたく企画しました。

フェアトレードはまだ認知度、関心が高いとは言えませんが、このフェアトレードフェスタに参加し、地域研修報告会で皆さんに少しでも知ってもらえたことだと思います。そしてこのフェスタを通して、今年も様々な社会人、他大学、この業界の人と関わり、実践的にフェアトレードに関わったことはいい経験になりました。



池原 誉人
地域経済学科3年
帯広緑陽高校出身

地域研修、フェアトレードフェスタを終えて

平野ゼミで参加したフェアトレードフェスタではステージを担当し、ステージイベントを企画しました。イベントに参加することで普段あまり見かけないフェアトレード商品をたくさん目にすることもでき、長年にわたってフェアトレードの活動で発展途上国のサポートをしてきた人の話を聞くこともできて、非常にためになりました。また、十月祭ではフェアトレード商品のお店を自ら出店しました。実際に自分たちでフェアトレードのお店を運営していく中で、フェアトレード商品を使うことで原価が上がってしまっただけが比較的高くなってしまふなどのフェアトレードの問題を身をもって体験しました。これからもこういった活動を通してフェアトレード商品の良さを少しずつでも伝えていきたいなと思います。



畠山 拓武
経済学科3年
北見北斗高校出身





サケを中心とする地域産業の形成

研修地：標津町

●研修目的

サケは北海道の水産業にとって最も重要な魚種である。単に漁獲量が大きだけでなく、水産加工業が幅広く成立しているため、産業としての広がりが大きい。このサケの文化・放流から漁獲・加工・流通までを実際に体験することでサケ産業を理解することが目的である。

研修地・日程

9月26日	阿寒湖ネイチャーセンター
9月27日	水産加工実習（研修先：マ印神内商店） サケ人工授精実習等（研修先：サーモン科学館） 講義「サケの流通・消費」講師：仲村敏彰氏（標津町水産課）
9月28日	サケ定置漁業乗船実習

写真キャプション

① 荷さばき所。②③ 神内商店を見学。④⑤ 新巻づくり体験。⑥⑦ 乗船実習。



●総括

サケ漁業は「つくる漁業」の優等生ともいわれ、人工授精からはじまり、安定した漁獲量を維持し続けている。また、標津町ではかつて近隣の水産加工場で発生したO157事件を契機として、漁獲から加工・輸送に至るまでの衛生管理を地域ぐるみでおこなう地域HACCPを導入している。

本研修ではふだん深く意識することなく消費しているサケの加工・流通の現場を実際に体験することで、水産業を単なる知識ではなく実体的に理解することができたと思われる。

学生研修記

地域研修を終えて



酒井 直人

地域経済学科 2年
北海道高校出身

古林ゼミ I での今回の地域研修では、僕たちは三日間にわたって北海道東部にある標津町へサケの漁獲・加工・流通について学習しに行きました。標津町は非常にサケなどの漁獲量が大きく漁業が盛んな町です。サケを獲り、消費者へ安全に商品を届けるまでの流れにおいてははじめから終わりまでとても大変な作業の繰り返しで、衛生面や安全面でとても細かい部分まで徹底した作業を行っていました。そこには、消費者を第一に考えた現地の方々の惜しみない努力がありました。

また現地で僕たちは伝統的な新巻鮭づくりの体験をしたり、実際に漁師の方々の漁船に乗せてもらい乗船実習をしてサケの漁を間近で体験することができました。

このゼミではほかのゼミに比べると、ただ現地の方の話を聞いたり目で見たりするだけでなく、学生自らが体を動かし身をもって体験することができます。そのどれもがこのゼミでしか体験できないもので、貴重な体験ができたと思います。

標津の鮭は日本一

古林ゼミの研修地は北海道標津町で、私たちの身近な食べ物である鮭がどのように獲られて、加工されているか体験を通して学びました。

研修一日目は、学校からバスで出発し、標津に向かうための移動が主でした。二日目からは、標津町にあるマ印神内商店で、どのようにいくらの加工や身の加工を行っているかを見学させていただきました。加工場に入るには、マスクや作業帽子の着用はもちろん、菌を払うためのエアを浴びなければならないと説明を受け、とても衛生管理が徹底されていると感じました。そのあと実際に新巻鮭の加工を体験しました。包丁でさえあまり使ったことないゼミ生がほとんどだったので、大変苦労しましたが、なんとか一人一匹新巻鮭を加工することができました。

三日目はなんと朝の2:30頃から研修を開始しました。何をしたかという、鮭漁が行われる船に乗せていただきました。寒いと聞かされていたので、厚着をしていましたがものすごく寒かったです。網を引く作業を体験したゼミ生は、すごく重かったけど貴重な体験だったと楽しそうに語っていました。今回の研修では、鮭を加工したり漁船に乗ったりすごくハードでしたが、このような体験をすることによって、話を聞いたり資料を見るだけでは知ることのできない苦労やありがたみを感じました。標津の鮭は日本一!!



茶谷 和馬

地域経済学科 3年
札幌啓北商業高校出身



古林英一ゼミⅡ

参加学生数11人



古林 英一

地域経済学科
教授

軽種馬の生産・育成・流通および利用

研修地：新冠町・新ひだか町・様似町・浦河町・日高町

●研修目的

サラブレッドの生産・育成は北海道日高地区の基幹的な地場産業である。本研修においてはサラブレッドの生産・育成・流通の諸段階を体験・見学し、当該産業の理解を深めることを目的とする。

研修地・日程

9月11日	ホロシリ乗馬クラブ（新冠町） 日高軽種馬農協北海道市場（新ひだか町）
9月12日	日本中央競馬会日高育成牧場（浦河町） 高村牧場（様似町） 門別競馬場（日高町）

●総括

わが国は世界有数のサラブレッド生産大国であり、日高地方はわが国のサラブレッド生産の中心となっている。今回の実習では、1日目に乗馬の体験実習をおこなった後、北海道市場において市場施設の見学とサラブレッド生産のレクチャーを受けた。2日目は日本中央競馬会日高育成牧場で、サラブレッドの育成に関するレクチャーを受けた後、高度な科学的育成の現場を見学した。その後、様似町の高村牧場で、サラブレッドの日常的な飼養管理を実際に体験し、最後に門別競馬場で開催中の道営ホッカイドウ競馬のレースと施設の見学をおこなった。

馬に初めて触れた学生がほとんどであり、本研修を通じて、華やかな競馬場でのレースを支えるために、数多くの人たちの多大な労働が投入されており、それらが地域産業として成立していることを理解できたと思われる。

写真キャプション

①②③④ 日高育成牧場。⑤ 高村牧場での馬の放牧体験。⑥⑦ 高村牧場で馬小屋の清掃を体験。



黒澤 凜
地域経済学科3年
小樽桜陽高校出身

人生、何事も経験

私達古林ゼミは、様似町を中心地として馬の世話や生育をテーマに地域研修を行いました。一日目はセリの流れ、馬の厩舎や飼育方法の説明していただき、実際に乗馬体験をしたり、仔馬と触れ合ったりして、馬の生態を知りました。二日目には、馬小屋の掃除体験で世話の大変さを知り、私としては人生初の競馬場へ行き、競馬も体験できました。そのレースでは見事に予想的中させ、少しながらお金も増やすことができ、いい気分で研修を終えることができました。正直なところ、研修に行くまでは、生物の生育などに対するの興味がそれほど高くはなかったのですが、この研修を通して、前よりも馬という存在を身近に感じるようになりました。また、競馬もただのギャンブルだろうと敬遠していた私ですが、実際にやってみるとなかなか楽しいものでした。人生経験が大事だと改めて実感し、自分の価値観も変わる良い研修でした。馬の世話などは大変な部分もありますが、みんなで競馬や乗馬を体験し、楽しんでみたいという方は是非古林ゼミまでお越しください!!



平原 凜太郎
地域経済学科3年
札幌西陵高校出身

日高の馬産業

今回私たちは、「馬の生産・流通・利用について実際に体験し、理解を深める」という研修テーマの下、地域研修で日高に行きました。研修の流れとしては、まず「ホロシリ乗馬クラブ」に行き乗馬体験をしました。実際に馬に乗るのは初めてだったので少し怖かったのですが、良い経験になりました。次に向かったところは「JBBA 北海道市場」というところで、ここは生産された競走馬をセリにかけるところで、実際に施設内に入り、セリの流れなどの説明をしていただきました。

また、「日高育成牧場」では馬を調教しているところを見せていただき、様似町にある「高村牧場」さんでは、馬の放牧と馬小屋の清掃をさせていただき、牧場のお仕事の大変さを実際に体験しました。全日程を通して、非常に良い経験となりました。





水野 邦彦
地域経済学科
教授

朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修

研修地：幌加内町

●研修目的

北海道内でおこなわれた朝鮮人強制労働の痕跡が比較的良好に残っているのが朱鞠内である。朱鞠内でのダム工事現場をはじめ、犠牲者が運びこまれた寺、遺体が埋められた共同墓地などを訪ねて歩き、専門家の説明に学ぶ。

研修地・日程

9月15日	朱鞠内湖・雨竜ダム、願いの像、共同墓地、笹の墓標展示館
9月16日	まどか、鷹泊墓地

●総括

朱鞠内では名雨線鉄道工事につづき1939年から朱鞠内湖の雨竜ダム建設工事がおこなわれた。ダム工事には常時2,000人、最大7,000人、延べ600万人の労働者がかかわり、その平均年齢は30歳であったという。ここには朝鮮人も大量に投入され、判明分だけで日本人168人、朝鮮人45人、計213人が死亡したとされるが、朝鮮人死亡者数は未詳。「高所から落ちてそのままコンクリートで埋めこまれた朝鮮人がいた」「湖の底にどれだけの人が埋まっているかわからない」との証言もある。朝鮮人死亡者の遺体はたいてい林のなかに埋められ、だれがどこに埋まっているのか不明であったが、遺骨の発掘と返還が近年つづけられている。

研修では、歴史家の小野寺正巳先生（元 北海道拓殖短大）に同行いただき、ダム現場・遺骨発掘現場・「笹の墓標展示館」などでくわしい説明をお聞きした。工事の犠牲者はいったん光顕寺に運びこまれるのが常であったが、この光顕寺が現在「笹の墓標展示館」として公開されており、いまでも身元不明の遺骨や位牌が保存されている。

研修一行は、かつての小学校校舎を改造した宿泊施設「まどか」に泊まり、夜はバーベキュー、翌朝はそば打ち体験をおこなった。

学生研修記

朱鞠内のタコ部屋労働

研修で元拓殖短大の小野寺正巳先生は、正義感に裏打ちされたとてもよいお話をしてくださった。北海道開拓の労働のために、まず囚人や、仕事をもとめる本州の貧しい人々が投入された。さらに周旋屋によって借金を背負わされた人々も工事現場に連れてこられ、タコ部屋労働とよばれる労働を強いられた。タコ部屋労働とは、棒頭の監視のもとで身体的精神的に負担の大きい長時間労働を強いられ、食事中も夜も監視され逃れられないなかでの労働、いわば監獄労働をさすものである。労働の重さにくらべ食事は粗末なもので、労働者はみるみる体力を失い、しかし作業の手を止めると棒頭に暴行されると医師を脅して死因を書き換えさせることが多かったという。タコ部屋労働にはのちに朝鮮半島から連れてこられた朝鮮人が投入され、朝鮮人労働者の死者も多かった。

工事犠牲者と「民族の和解と友好を願う像」

紙の原料と発電のための水をもとめて朱鞠内湖で1939年から1945年までダム工事がおこなわれた。ダム工事の苛酷な労働、および栄養失調により、6年間で200人以上が死亡した。死亡者の約6割は朱鞠内の共同墓地に埋葬されたが、身元不明の遺骨が多々あった。空知民衆史講座では1980年以來4度にわたる発掘調査をおこない、共同墓地で16体の遺骨を発掘し、遺族に返還する活動をすすめるとともに、1991年に「生命の尊さにめざめ民族の和解と友好を願う像」を立てた。その碑文には、日中戦争から太平洋戦争にいたるまでの9年間、朱鞠内で過酷な労働がおこなわれたことなどが刻まれている。また、かつての光顕寺が「笹の墓標展示館」になり、ダム工事と朝鮮人強制労働の歴史が展示されるとともに、東アジアの若者たちの学習と交流の場となっている。

写真キャプション

- ① 小野寺正巳先生。② 遺骨発掘現場での説明。③ 発掘された朝鮮人遺骨が埋められている共同の墓。
- ④ 「笹の墓標展示館」での講義。⑤ そば打ち体験。⑥ そばを味わう。



金子 佑海
地域経済学科2年
北海道出身



鹿嶋 佑斗
地域経済学科3年
富良野高校出身



山田誠治ゼミ I

参加学生数15人



山田 誠治

地域経済学科
教授

富良野・美瑛の観光の取り組みを知る

研修地：富良野市

●研修目的

ゼミでは地域ブランドについての学習を積み重ね、基礎的な概念や事例について学んできた。地域研修では、知名度の高い富良野・美瑛を実際に訪問し、知名度が高めることができた取組や、その背景、またこれまでの行政の観光の取り組みや今後の政策について調べてきた。

研修地・日程

9月11日	富良野市商工観光課 ファーム富田 美瑛の丘
9月12日	〈グループ別観光検証〉 ふらの大地を感じよう 徒歩コース（×2） ふらの風を感じよう 自転車コース（×2）

写真キャプション

- ① 富良野の観光政策を松木さんから学ぶ。② ファーム富田でインタビューへ。③ 美しい美瑛の夕焼け。④ 観光情報はきめ細かく。⑤ オムカレーで富良野を元気に。⑥ 富良野の観光マップ。



1



2



3

●総括

富良野市は、現在美瑛などの周辺地域と連携して広域型滞在型観光地として、1,000万人の来訪を目標とした観光政策を展開し、豊かな自然を活かし、そのためにイメージ戦略、ターゲット層を絞ったPR等を行っている。私たちは、実際に各スポットを訪問し、直接体験して、来訪している観光客や担い手へのインタビューを行い、富良野の魅力がどこにあり、そのための取組はどのようなものか、検証した。

一日目は、富良野市役所の観光政策を担当されている松木さんから政策の説明を受け、それぞれの顧客ターゲットに対し、きめ細かく、かつリスク回避型のデータにもとづく新しい展開を考えていることが判った。次に、ファーム富田のラベンダー畑に向かい、海外・国内それぞれから訪問している観光客のインタビューを行った。全般的に、高い知名度に惹かれてという回答が多く、年齢層も広く、リピーターも多かったが、滞在型のねらいはまだまだ、ということが確認にできた。翌日は、富良野市内観光の各コースをそれぞれ手分けして調査を行った。今後は、実際に見てきたことと、地域の課題との関係の今後の可能性についてさらなる課題があることが確かめられたのではないかと。

学生研修記

難しそうなお客層の変化への対応



品田 政希

地域経済学科2年
札幌北陵高校出身

私が印象に残ったのは、富良野市役所で職員の松木さんからお話を伺ったことで、特に外国人観光客にターゲットがシフトチェンジしつつあるということである。このことには、メリットとデメリットの両方があると考えられ、メリットとしては、人口が減少傾向にある日本国内に需要を求めると、外国人観光客を多く呼び込んだ方が集客に期待が持てる。しかし、その反面、日本人観光客との間で満足度に違いが生じ、特に観光スポット全体的に価格は高めなのもあり、海外からの来訪者にとっては多少値段がはるものであっても食べたり、体験したりするかもしれないが、道内客の日帰りドライブの人々など比較的に気軽な気持ちで訪れた人々には少し敷居が高いように感じられた。頻繁なリピーターを期待するのと両立するのか、課題があるように考えさせられた。

北海道ブランドを支えている首都圏の固定層



前田 亜美

地域経済学科2年
中標津高校出身

今回、富良野で学んだことで印象的だったのは「外国人の旅行勧誘」である。私は外国人の旅行勧誘に対して国内の旅行者よりも慎重に考えていた。言語やマナーといった問題もあり、またここまで慎重なのは島国日本や北海道ならではの考えなのか？他国もこういった考えは同じなのか？と疑問が浮かんだ。実際には、富良野は外国人観光客に対してアットホームな接し方で心をキャッチしようとしているという印象を受けた。市役所の方の話でもあったが、アフタースキーは書道やお茶など地元や日本の文化と親しめるような企画を行っており、こういった取り組みは、その国のマナーを知る機会にもなる。ただ外国旅行をして楽しかったというだけよりもその人の心に深く残り、うまくマッチングすればリピーターになる可能性もあり、今後様々な町がグローバルな観光が発展していくのだと思った。



4



5



6



長野・小布施町の地域ブランドと東京の北海道ブランド

研修地：長野県小布施町・東京都

●研修目的

ゼミでは「まちの地域ブランド化」および「地域ブランド」の意義について学習を積み重ねてきたので、全国的に知名度を高めた長野県小布施町のまちづくりと、東京での北海道ブランドがどのように展開されているか、の二つのテーマの調査を行った。

研修地・日程

10月21日 札幌 → 東京 → 長野
 小布施町役場
 小布施町の観光施設
 長野市善光寺
 長野 → 東京
 〈グループ別地域ブランド検証〉
 新宿、浅草
 〈グループ別地域ブランド検証〉
 たまプラーザ、巣鴨
 東京 → 札幌

●総括

前半のテーマである小布施町のまちの地域ブランド化の実検では、学生が下調べした以上に、きめ細やかな取り組みがなされていることが体感できたのではないだろうか。

観光のまちづくりの柱は、「栗」・「北斎」・「花の町」であるが、その経緯も歴史的に積み重ねてきたものとなっており、町並修景事業というもの、町内各所のすみずみから統一的な雰囲気醸し出している点に学生は注目したようだ。また、企業誘致の点でも、まちづくりにフィットするきめ細かな進め方と議論の積み重ねが、実際場で実感できたようだ。

後半の東京都での北海道ブランドの調査では、4つのグループが「新宿」「浅草」「たまプラーザ」「巣鴨」の地域をそれぞれ担当し、北海道のブランドショップでの消費者や従業者のインタビュー、北海道産の農水産物の販売状況、飲食店などでの「北海道」ブランド色がどのように取り入れられているか、について足で確かめる調査であった。地点ごとに調査活動の濃淡はあったが、それぞれ、好まれている顧客層やその嗜好性の特徴、また、地元とのそれとの違いなど、北海道ブランドの力強さを感じ取れたのではないだろうか。

学生研修記

隅々までいきどいた小布施町の街づくり



只木 志保

地域経済学科3年
札幌啓成高校出身

小布施町は、栗・北斎・花の町として推しだしている。気候が果樹栽培、特に栗の栽培に適して盛んになっており、葛飾北斎が幾度に渡り訪れた場所でもある。この産物から特色ある栗菓子と北斎の肉筆画を集めた北斎館を開館した。また、花の町のコンセプトのもと、各家庭の庭をオープンガーデンとし、10年目を迎え130軒になっている。

また、町並修景事業の力の入れ方がすごく、国道、駐車場、看板すべてのものに気を配って町の雰囲気の統一が心がけられていた。町外企業などを小布施町に誘致する際も、色味の抑えた外観を提案しつつ誘致する、というのは大変苦労することだろうが、そこまでこだわりに感銘を受けた。まちづくりのうえで町民との協働を重要視していることもよいと思った。本当に一から町民が携われるような仕組みで、町全体でまちづくりをしており、理想のまちづくりのやり方だと思った。

北海道ブランドを支えている首都圏の固定層



池田 優月

地域経済学科3年
大森高校出身

私たちのグループは、雷門から徒歩3分ほどの場所にある浅草のアンテナショップの調査へ向かった。立地的には観光客を呼び込むのにも適していると思ったが、店長さんにお話を伺ったところ利用者は地元の人が多く、リピーターがほとんどだという。また、このアンテナショップでは「デパートの北海道物産展では置かないもの」「北海道の人がマイナーだと喜ぶもの」を重点的に仕入れているらしく、北海道出身の自分たちでも見たことのないものが多数置いてあった。

利用客のほとんどは海鮮目当てで訪れるといい、冷凍庫や保存のきく加工品などが約半分を占めていた。北海道出身・埼玉在住のご夫婦のお話を聞くことができた。買っていたものは「ホンコンやさそば」であった。関東に住む方にとっては懐かしくも感じられたようで、こうした層が北海道ブランドの需要を支えていることが解りました。

写真キャプション

- ① 小布施町の観光はきめ細かいです。② 小布施でも学習します。③ 小布施町の図書館は日本一です。④ 伝統の施設を現代に生かす。⑤ 栗は小布施の地域ブランド。⑥ 東京の北海道アンテナショップです。



1



2



3



4



5



6

40番教室 報告順序

- ① 小坂ゼミ I・II (苫小牧) 30名
- ② 小田ゼミ I・II (苫前) 31名
- ③ 水野ゼミ I・II (幌加内) 17名
- ④ 高原ゼミ II (帯広ほか) 13名
- ⑤ 中園ゼミ I・II (旭川) 12名
- ⑥ 西村ゼミ II (下川) 26名
- ⑦ 高原ゼミ I (帯広ほか) 12名

●出席カード感想文より抜粋

- 電力供給について発表した小坂ゼミが良かった。電力の問題はこれから重要になってゆくと思うので、原発を廃止するのであれば太陽光発電などの新たなエネルギーが重要になってくると思った。 [小田ゼミ I]
- 西村ゼミの発表は聞いている人に質問を投げかけたりするなど、身近に感じやすいものだった。 [水野ゼミ I]

34番教室 報告順序

- ① 古林ゼミ I (標津) 12名
- ② 平野ゼミ I (札幌) 11名
- ③ 山田ゼミ I (富良野) 15名
- ④ 佐藤ゼミ I・II (伊達・寿都) 30名
- ⑤ 奥田ゼミ I・II (旭川) 18名
- ⑥ 古林ゼミ II (様似ほか) 11名
- ⑦ 山田ゼミ II (長野県) 9名
- ⑧ 平野ゼミ II (札幌) 3名

50番教室 報告順序

- ① 浅妻ゼミ I (芦別) 14名
- ② 内田ゼミ I・II (上士幌) 31名
- ③ 大貝ゼミ I (十勝) 11名
- ④ 川村ゼミ I (札幌) 13名
- ⑤ 浅妻ゼミ II (芦別) 8名
- ⑥ 大貝ゼミ II (大阪府) 13名
- ⑦ 川村ゼミ II (札幌) 4名

- 大貝ゼミ I が印象に残った。「6次産業」は聞いたことはあったが内容は良く知らなかったので良い機会だった。また十勝のいろいろな町の農業の一部を知ることができ良かった。 [内田ゼミ II]
- 将来自分も就職していくので、若者の雇用・労働状態についての川村ゼミ II の発表は魅力的で自分のためになった。これほどまでに労働環境や待遇が悪い事例があることにびっくりした。 [浅妻ゼミ I]

- 平野ゼミ I ではパワーポイントのアニメーションを使っていたので参考にしたい。十月祭に出店することでフェアトレードについて学習していたことが良いと思った。 [古林ゼミ I]
- 古林ゼミ II の題材がユニークだったこと、日本のサラブレッドの96%が北海道で生まれているということが強く印象に残った。 [佐藤ゼミ I]
- 山田ゼミ II では研修先で一般の人にインタビューするなど研修でしか手に入らない情報を手に入れていたため良かった。 [佐藤ゼミ II]





北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2013



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2014年3月発行

制作:(株) ロボット